

【研究ノート】

新しい話者の視座から見た琉球諸語の開花の取り組み

ズラズリ美穂*

要旨

筆者は現在、博士研究の一環として、Hintonのマスター・アプレンティス言語学習プログラムを参考にして、琉球諸語の新しい話者の支援に焦点を当てたMAI-Ryukyusプロジェクトを実施している。研究の問いは、新しい話者が琉球諸語を話す原動力、琉球諸語の多様性を可能な限り温存した言語習得、琉球の世界観に基づいた思考の枠組み（研究パラダイム）の探究である。本稿では、その中間所見に基づいて、琉球諸語話者が抱える心理的トラウマ、琉球諸語の言語運用能力を高め多様性を温存する方法、琉球の思考の枠組み、現行の日本国行政の問題点について考察した。

キーワード：新しい話者，危機言語，言語復興，琉球諸語

はじめに

本稿では、現在、筆者が博士研究の一環として実施している、琉球諸語の新しい話者の支援に焦点を当てたMAI-Ryukyusプロジェクトの中間所見についての考察と、今後の展望について述べる。

1. 研究背景

琉球列島では、琉球諸語を母語として話すことのできる第二次世界大戦前生まれの人々が超高齢期に入り始め、戦後米軍統治下における自発的な標準語励行運動¹⁾によって、就学期以降、琉球諸語を使用しなくなった世代〔長谷川 2014〕も早70代となった。一方、地域によって世代は前後するが、例えば、沖永良部島での横山、籠宮〔2019〕の調査によると、現在の40代はまだ琉球諸語を耳にして理解することができ、その年代を下回ると急激に理解能力が落ちていく。多くの記述言語学者が各地の琉球諸語の記録と記述に精力的に取り組んでいるが〔国立国語研究所 発行年不明a〕、日本語コーパス〔国立国語研究所 発行年不明b〕のように豊富な用例を収めた資料は存在しない。

したがって、現存する琉球諸語の生きた用例を存続、発展させるためには、母語として琉球諸語に触れた経験のある70代以上の世代²⁾が存命であるうちに、琉球諸語の理解能力がある人々をはじめとする若い成人世代が話者の言語使用を積極的に記録、習得する必要

* ロンドン大学東洋アフリカ研究学院言語学博士課程 英国芸術・人文科学研究会議南東イングランド人文科学・芸術コンソーシアム DPT2 奨学生

がある。そうすることで、次世代の子供たちも日常生活の中で親世代とともに琉球諸語を使用、発展させていくことができ、将来的に母語話者として琉球諸語の使用を継続できる可能性が高くなる。

社会の中で使用領域が狭くなり使用頻度も低下した言語はendangered languages（絶滅の危機に瀕した言語）と通称され、こうした言語の使用を高めようとする動きはlanguage revitalization（言語復興，言語再活性化：以下LR）と呼ばれているが [Hintonほか 2018]，Roche [2020] の批判によると，生物のendangered species（絶滅危惧種）を連想させるこうした論調は，背景にある話者の人権抑圧を見えにくくさせるという。また，時代の変遷とともに，他言語との接触や社会構造の変化を通して言語使用のあり方も変化していくため，新しい話者³⁾が今後使用していく琉球諸語が，必ずしも過去に話されていた琉球諸語と一致するわけではない。そこで，本稿では，日常生活の中で琉球諸語使用を高めようとする動きを一貫して琉球諸語の「開花」[Rocheほか 2018]の取り組みと表現することにした。

1-1 研究の問い

学問分野としてのLRはまだ黎明期にあり，更なる実証研究と理論化が必要である。琉球諸語の開花の取り組みが現在直面している数ある問題のうち，本研究では「新しい話者が琉球諸語の使用を継続する原動力を高めるにはどうすればよいか」また「琉球諸語の多様性を可能な限り温存して言語習得するにはどうすればよいか」という点に着目したい。また，そうした問いを探究する研究パラダイムそのものにも日本的な思考の枠組みや西洋的な思考の枠組みが存在するため，琉球諸語が危機に瀕するに至った根本的原因を克服するために，琉球の世界観に基づいた思考の枠組みに適う研究パラダイムを追求したい。マオリの人々にも，Kaupapa [Bishop 1998] という独自の研究パラダイムが存在する。

1-2 研究の意義

既存のLR活動を含め，琉球諸語の開花の取り組み全体を新しい話者の視座から捉え直すことにより，必ずしも互いに動機や目的が一致しない様々な背景の当事者間での連携が可能となる。また，既存のLR活動が直面している問題について，学際的な問いを立てることにより，従来の縦割りの学問分野では対応できない諸関連分野間の連携が可能となる。

近年，持続可能な社会 [Degai & Petrov 2021] [Priyadarshini & Abhilash 2019] [Tovarほか 2021]，さらには再生可能な文化 [Wahl 2020] の観点から，社会の様々な領域でIndigenous communities（その土地で代々暮らしてきた人々の地域社会）の営みを見直そうという動きがみられる。琉球諸語の開花の取り組みにおける連携も，言語学分野内での連携ネットワークに留まらず，社会全体のこうした動きと連動させることで，多分野における小さな成功が重なり合っ，ある時点で一気に社会全体の風向きが変化するtipping point（転換点） [Gladwell 2002] を迎えられる可能性がある⁴⁾。

2. 研究パラダイム

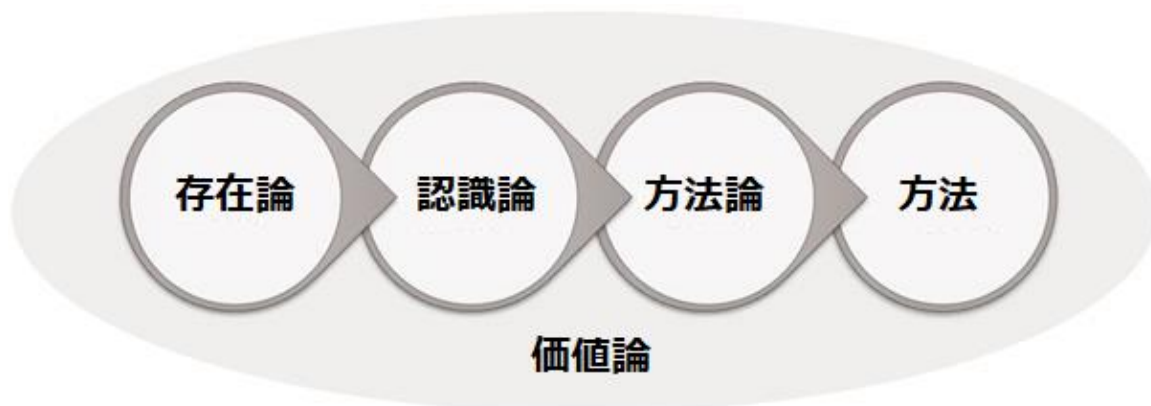
2-1 理論的枠組み

GubaおよびLincoln [Gubaほか 2017]によると、研究者は、自覚しているか否かを問わず独自の哲学的な信念体系を抱いており、それに見合う研究パラダイムの理論的枠組みに基づいて方法論をデザインしている（図1）。

本研究では、その理論的枠組みとして、Mertenのトランスフォーマティブ・アプローチを採用した [武田 2015] [Romm 2015] [Widianingsih & Mertens 2019]。この枠組みにおける存在論（現実世界の捉え方）は、社会を代表する見解には権力を持つ人々の声が反映され、社会の中で抑圧ないし周縁化された人々の声は不可視化されるというものである。また、認識論（参加者とのかかわり方）として、研究者は、社会の中で不可視化されている人々の声を重視し、彼らの直面している格差が少しでも是正されることを目指す。

この理論的枠組みに基づいて、前述した研究の問いを探究するために、米国カリフォルニア州で1990年代から実践されているHintonのマスター・アプレンティス言語学習プログラム [Hintonほか 2018] に準じたアクションリサーチをデザインした。これは、琉球諸語が話せるようになりたい新しい話者（アプレンティスに相当）に、身近な話者（マスターに相当）と一緒に過ごす時間を作ってもらい、日常生活の中で可能な限り琉球諸語を使用してもらおうというものである。現在、その試みを通して次々と浮き彫りになる問題について、原因を考え、解決法を考案し、試行を繰り返すという作業をしている。最終的に、本研究の所見をもとに仮説を立てる予定である。

図1 研究パラダイムの理論的枠組みの構成要素



GubaおよびLincoln [Gubaほか 2017] に基づき筆者作成。

2-2 研究の実施内容

筆者自身も新しい話者として本研究に参加しているため、研究期間全体を通して、オートエスノグラフィー [Adamsほか 2015] を実施している。オートエスノグラフィーとは、理性と情動を包括的に捉えた自己の経験を通して、他者との関係性や社会の通念および慣習を記述し、批判的に分析する行為である。特定の文脈と一般的な文脈、個人的な文脈と政治的な文脈を絶えず行き来することで、自己と社会が交差する領域を再帰的に振り返り、

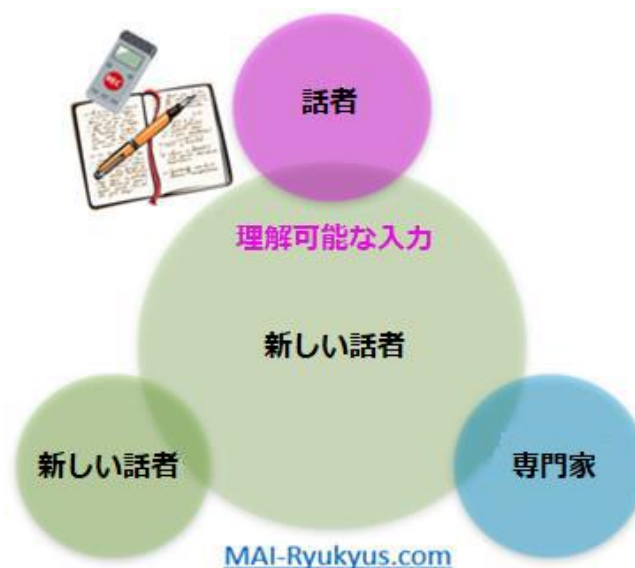
自己の偏見や新たな洞察を注意深く探索する。そうした作業を通して、自他の葛藤の意味や生き方の方向性を見出していく。また、オートエスノグラフィーの所見は、記録した理性と情動を包括的に表現できるよう、芸術的な作品の形で提示されることも多い⁵⁾。琉球諸語の話者や新しい話者が経験する葛藤や喜びを伝える方法としても、有効なアプローチかもしれない。

また、当初の計画では、2019年夏から2023年夏にかけて4カ月ごとに数週間ずつ琉球列島に滞在して新しい話者の募集とエスノグラフィーを実施し、現地を離れている間はオンラインで参加者を追跡する予定であった。2020年春以降、新型コロナウイルスの世界的大流行により現地訪問が不可能となってからは、参加者募集をオンラインに切り替えた。現地でのエスノグラフィーが不可能になったことで、自身の内的思考を相対的に捉えることが難しくなったため、一部の研究者や参加者に協力を依頼して、必要に応じて協働オートエスノグラフィー [Changほか 2013] も実施している。研究者による物理的な直接介入が不可能となったため、参加者の自発性が相対的に高くなり、アクションリサーチも参与型アクションリサーチに移行し始めている。

2019年7月～8月と2020年2月～3月の計2回、約3週間ずつ、沖縄島の実家に拠点置いて、琉球諸語の話者および新しい話者、行政関係者、研究者、一般の人々と積極的に交流し、エスノグラフィーを実施した。また、新しい話者の参加者を募り、現地滞在中に初回面接を実施した。実家滞在中は、父に極力、沖縄語である読谷村の波平（はんじゃ）言葉で話しかけてもらい、筆者も覚えた表現を積極的に使うよう心掛けた。現地で知り合った話者や新しい話者とも可能な限り琉球諸語を使うようにした（主に沖縄語であった）。

2020年6月に「日常生活の中で話者と新しい話者が一緒に過ごす時間」「新しい話者同士の自助ネットワーク」「専門家のサポート」の3本の柱で構成されるMAI⁶⁾ -Ryukyusプロジェクトを立ち上げた（図2）。希望者にはログブックとICレコーダーも配布している。

図2 MAI-Ryukyusプロジェクトの構成



筆者自身の実施しているプロジェクトに基づき筆者作成。

3. 中間所見と考察

3-1 参加者

これまでに約20人から問い合わせがあり、このうち現在、追跡インタビューを継続している参加者は約10人である。参加者募集をオンラインに切り替えてからは、地理的制約がなくなったため、沖縄島以外の島々や琉球ディアスポラなどからも時折、問い合わせが入るようになった。琉球に直接かかわりはないが興味があるという人もいた。

3-2 心理的トラウマ

筆者と出会う前に、すでに話者と琉球諸語で話そうと試みていた参加者を除き、ほぼ全員が、話者と琉球諸語を話そうとすることに心理的負担を感じ、なかなか始められないでいる。一方、話者のほうは、相手を問わず自由に琉球諸語で話しかけられる人から、琉球諸語を使用することに戸惑い、羞恥心、強い苦痛を感じる人まで様々であった。オートエスノグラフィーの記録に基づいて、筆者自身の身内とのやり取りを以下にかいつまんで提示する。

表1 筆者自身の身内とのやり取り

<p>2019年1月 英国にて</p>	<p>(父は耳が遠いため、離れているときは文面だけのやりとり)</p> <p>LINEで、父（1940年生まれ）に初めて沖縄語でメッセージを送った。最初は日本語で返事が来たが、沖縄語でメッセージを送り続けていたら、沖縄語で返事が来るようになった。</p> <p>文法知識が全くない状態で、オンライン辞書で沖縄語表現を調べ、日本語から沖縄語に逐次翻訳し続けた。語彙も用例も極端に少なかったため、非常にいらいらした。</p> <p>降参して父に助けを求めると、すぐに翻訳してくれた。まったく馴染みのない新出表現でない限り、父の翻訳はスッと理解でき、身体にぴったり馴染む感じがした。自分で産出できないのに、ことばを与えられると分かる自分に驚いた。</p> <p>語彙が日本語に似ているにもかかわらず、発想にずれがあって自分では到底思いつけない表現に接するたびに、話者が話すのをたくさん聞くことの大切さを痛感した。</p> <p>また、文面でのやりとりの際、漢字仮名交じり文であれば私にもすぐに理解できるが、父は一貫してカタカタ表記を使うため、頭の中で抑揚を伴う音声を再現できるまでは解読が難しかった。英語の論文をカタカナ表記のみで読むようなものだ。父は、日本語表記と区別するために、どうしてもカタカナで書きたいのだそうだ。</p>
-------------------------	--

<p>2019年7月 実家に滞在①</p>	<p>これまでの文面だけでのやりとりで、父は私が流暢に話せると勘違いしていた。直接話せると思うと嬉しくて、早速、父に沖縄語で話しかけると、私の発音があまりにも日本語訛りなので、父は想像とのギャップにショックを受けてしまい、数日間ぎこちない雰囲気になった。</p> <p>当初の研究デザインでは「日常生活の中で話者と新しい話者が一緒に過ごす」という漠然とした構想しか掲げていなかったため、具体的に何をしてよいか分からず、過去の英国での日本語教育の経験から、CEFRのCan-doタスク [国際交流基金 2018] をやってみることにした。</p> <p>父がチラシで卓上ゴミ箱を作っていたので、「沖縄語で折り方を説明しながら教えて」とお願いすると、(私が作り方を知らないと思って) 快く説明してくれた。録音の準備が間に合わなかったため、聞き取れなかった細かいところを聞き直すと、途端に自分のことばに自信を失い、顔を真っ赤にした。</p> <p>数時間後、今度は録音機材を揃えて、再度、同じことをお願いすると、今度は何も言わずに黙々と折って完成させ、ずっと席を離れてしまった。</p> <p>何をすればよいか分からなかったが、とにかく一緒に過ごす時間だけは確保しようと思い、後日、再度お願いした。約束の時間が来ると、居間のソファに二人で座ったが、重苦しい沈黙の時間だけが過ぎ、苦痛を覚えた。</p> <p>どんな表現でもいいから時間を有効活用しなければと思い、「これは沖縄語で何と言いますか」「これは何ですか」という表現を沖縄語で何というかと質問してみた。</p> <p>ばかばかしくなった父は「お前は何も分からん、何も分からんくせに」と吐き捨てるように言って部屋を出て行ってしまった。</p>
<p>2019年8月 沖縄島と 近隣の島の 複数地域</p>	<p>他の地域で出会った話者にも父と同様のタスクを依頼してみたが、ことばの分からない相手に自分のことばで話しかけることや取って付けたようなタスクに気が進まない様子だった。</p> <p>ある方に「あなたは言語に囚われ過ぎだ」と指摘された。「生活自体を包括的に捉え、言語はあくまでそれに付随して後から付いてくるものだと捉えた方がいいのではないか」と助言された。</p>
<p>2019年8月 実家に滞在②</p>	<p>実家に戻ると、まず、父の日課を観察した。</p> <p>毎週日曜日に一人で庭の掃除をしているのに気づき、人手を欲しそうにしていたので、日曜日は必ず庭仕事を手伝うことにした。何度も「枝を集めて持っていけ」と繰り返すので、「それって沖縄語で何て言うの?」ときく</p>

	<p>と「枝集みやーい持ちーけー」とすんなり言ってくれた。</p> <p>それからは、沖縄語のことはいったん忘れ、とにかく父親とゆっくり少しでも心が充足するような時間を過ごすよう心がけた。他愛ないやり取りから父の貴重なライフストーリーまで、様々なことを話した。</p> <p>その中で時々「沖縄口では何て言うの？」という風にきっかけを作ると、だんだん積極的に色々な表現を教えてくれるようになった。</p>
<p>2019年8月 祖母を訪問</p>	<p>週に1回、父と一緒に、介護施設に入所している祖母（101歳）に会いに行った。父に勧められ、祖母とも沖縄語で話してみることにしたが、父のときとは違い、なぜか強い羞恥心を感じて尻込みしてしまった。</p> <p>祖母は自然な沖縄語で話しかけられれば沖縄語、たどたどしい沖縄語や日本語で話しかけられると、発話が自動的に日本語に切り替わってしまう。</p> <p>それでも父が祖母に熱心に沖縄語で語りかけてくれ、祖母が沖縄語で語り出すと、父でさえ初めて聞く祖母の若い頃の語りがあふれ出してきた。</p> <p>この頃には常にレコーダーを持ち歩くようになっていたので、全て録音してある。記憶の中の情景を丸ごと喚起する沖縄語での語りは、日本語では到底、再現不可能だと思う。</p> <p>父が介護職員と何か話し込んでいたので、先に車に戻って待っていると、父が戻ってきた。「『なんで、あれは、いつ方言分かるようになったのか？』っておばあちゃんが驚いていたよ」と父が嬉しそうに話しかけてきた。その上気した表情が何とも言えなかった。</p> <p>まだ実家で一緒に暮らしていた頃、父はいつも私たちの前で羞恥心を感じ、祖母と小声でしか沖縄語を話さなかったが、今では、私にも聞こえるように堂々と祖母と沖縄語で会話を楽しんでいる。胸がつかえて、涙があふれてきた。断絶していた世代間の記憶が繋がったような気がした [横山 2019]。</p> <p>今まで本当に取り戻したかったのは、価値があると言われているから価値がある琉球諸語でも、単にかすかに愛着がある沖縄語でもなかった。いつも付き纏っていた空虚感。それを埋めるために私が必要としていたのは、いま繋がっているこの時空だったのではないかと思った。親と生き別れたことのない私が、このような喩えをするのは不謹慎かもしれないが、生前に生き別れた産みの親に思いがけず再会したような衝撃であった。</p>

<p>2019年8月 実家に滞在③</p>	<p>戦後生まれの母は、私が父の後ろをついて回って沖縄語を口にするたびに、一貫して私のことを揶揄し、舌打ちをしたり、顔をしかめたりした。</p> <p>そういう対応を受けるたびに、私も激昂し「お母さんは沖縄口を100%理解できる。話そうと思えばいつでも話し始められるけど、話さない選択をしているだけ。私は話したくても話せない。ことばを選ぶ権利さえない。話そうと努力しているのに、それを妨げる権利はお母さんにはない。むしろ、お母さんが持っている知識を私にも分け与えるべきだ！」と主張したりした。すると、母も、ますます頑なになった。</p> <p>数日後、YouTubeで方言札の物語を扱った沖縄語の舞台劇を見つけたので母に見せたら、数秒と持たずに飛び上がるようにして部屋を出て行ってしまった。ああいう反応を示すとは思っていなかったのが驚いた。もしかすると、母も子供時代にとっても嫌な思いをしたのかもしれない。</p> <p>しまくとぅば県民意識調査に従事した知人が「昔は話すことを責められ、今は話さないことを責められる。二度も痛みを与えるのか」と年配の女性に感情的に訴えられたと話していたのを思い出した。</p>
<p>2020年3月 実家に滞在④</p>	<p>誰が何語で話そうと、基本的にその人の自由なのではないか。母が嫌だと言っているのに強要する私もおかしいのではないか。そう思い直して、後日、母親に「沖縄口を押し付けて嫌な思いをさせてごめんなさい」と謝った。意外だったようで、少し驚いていた。</p> <p>新しい話者がフェイスブックのメッセージで沖縄語で話しかけてきたので、私も沖縄語で返したいと思い、分かるところまで自分で書いて、ああでもない、こうでもない一人思い悩んだ。</p> <p>最近、父の外出が続いて、なかなか質問できるチャンスがないので、思い切って母に訊いてみた。「嫌な思いをさせて悪いんだけど、どうしてもわからなくて困っているから、知っていたら教えてくれない？」すると、なぜか、静かに対応して教えてくれた。</p> <p>それ以降は、あいかわらず沖縄語の文法に則って話すことには強い抵抗を示すものの、母の発話には、日本語の構造に組み込む形で、沖縄語の語彙がどんどん増えていった。</p> <p>「なんか、お母さん最近、沖縄口、いっぱい使ってない？」 「なんで、いーちまりは、いーちまりなのに。日本語にぴったりの表現はないさー。」(部屋の換気が悪くて息苦しい)</p> <p>数日後、母は、幼少期にいつも見に行っていた沖縄芝居の思い出を話して</p>

	くれた。いつも、壁の穴から覗き込んで見ていたそうだ。母は、そうやって沖縄語を覚えたいらしい。私に助言してくれたのだろうか。母も心の底では、沖縄語に深い愛着を抱いているのかもしれない。
2021年1月 英国にて	父に聞いたらなんでも教えてくれる。父が一切引け目なく私に沖縄語を使えるようになってから「父親」という頼もしさ、本当の「父親」という存在感が増して、ことばを交わした後に大きな安心感を覚える。（コロナで会えなくなってしまったが）生きて再会したい。[Zlazli 2021a]

以上の所見から明らかに言えることは、個人間で言語態度に差があるだけでなく、同一個人でも時間の経過とともに言語態度が変化することである。したがって、うまく行かない時期が続いたとしても、あきらめずに十分な時間的猶予を考慮する必要がある。新しい変化を起こすということは、多かれ少なかれ、現在の平衡状態が崩れるということを意味する。新しい平衡状態に達するまでは、身の安全が脅かされ、不安定な状態が続く可能性があるため、事前に心構えとして知っておくとよいかもしれない。

この不安定な時期に、特に心の支えとなるのが、MAI-Ryukyusプロジェクトの「新しい話者同士の自助ネットワーク」である。新しい話者が既存の社会通念や他者の好奇の目に晒されることなく、安心して自分の内面や新しい言語使用を探究できる「第三の場」[Soja 1996]として機能している。また、本研究プロジェクトに参加しなくても、すでに地域社会にいくつか新しい話者のネットワークが存在している。ただ、非公式である場合が多いため、信頼関係に基づいて、人づてにつながる必要がある。

3-3 家庭内か家庭外か

琉球諸語で交流したい身近な話者として、家庭内の話者を選ぶ参加者と家庭外の話者を選ぶ参加者は半々であった。家庭内で話者を選びたいと答えた参加者は、普段から交流のある自身の親や義親を選んだ。家庭外で話者を選びたいと答えた参加者の声は、以下の通りである。

表2 家庭外で話者を選びたいと答えた参加者の声

家庭内で 選ばない理由	「人間関係のしがらみがある」「人間関係がうまく行っていない」 「家庭内に話者がいない」「気恥ずかしい」「負担をかけたくない」 「なんとか絶妙の距離を保っているのに、近づき過ぎたら距離を取るのが難しくなる（相手は孤独で、自分は生活が忙しい）」
家庭外で 選ぶ理由	「会う目的が一致しているので気兼ねする必要がない」 「割り切って付き合えるから楽」

筆者の家庭は（母の意向により）幼少期から琉球諸語が排除される傾向があったため、この危機言語を危機言語たらしめた直接的原因に対処するために、筆者自身は、我が家に鎮座する心理的トラウマを直視したいと考えた。半年の間隔を空けて数週間ずつ計2回と

短期間の現地滞在であったが、言語態度に確実な変化が認められ、心理的トラウマも緩和されたと思う。新型コロナウイルスの世界的大流行による渡航制限のため、次回いつ帰省できるか全く見通しが立たないが、両親（70代、80代）と祖母（100歳代）に生きて再会できることを心から願っている。現在は、沖縄島訪問中に知り合った新しい話者たちの紹介で、オンラインで様々なイベントやワークショップに参加している。こうした仲間を通して琉球諸語を使用できる機会があることを非常に有難く思う。

3-4 琉球諸語の言語運用能力を高めるには？

本研究は、琉球諸語を日常的に使用したいと思っている新しい話者の参加があることを前提に進めているが、必ずしも参加者全員が高度な言語運用能力を獲得しなければならないわけではない。マン島政府でマン島語の言語政策に携わり、自身も新しい話者である Robert Teare 氏も、日常生活におけるマン島語使用を次世代に確実に伝えていく上で重要なのは、世代ごとに高度な言語運用能力を有する話者を一定人数確保することだと述べている。幸い、沖縄県 [2020] は現在、しまくとうば普及推進計画に予算を充てている。琉球諸語が得意で地域の話者育成にも意欲を持っている少数精鋭の新しい話者に、さらに言語運用能力を向上させる機会を与え、記述言語学／言語習得学／言語教育学などの高度な専門教育を提供するために、助成金を申請するのも一案である。

Usage-based Theory（用法基盤理論）の観点からすると、話すための言語の習得は「聞いた言語を適切に再利用することを学ぶことだ」と捉えることができる⁷⁾ [Theakston & Lieven 2017]。この方法は、学習教材が不十分であっても話者がまだ身近にいる、標準化されていない口語を学ぶのにも適しているのではないだろうか。ただ、日本で言語教育を受けた人々は、話すための言語習得よりも、読んで理解するための言語学習に慣れている [Akamatsu 1998]。つまり、新しい言語を耳で聴いて慣れて覚えるよりも、眼で読むことに慣れてしまっている。琉球諸語の音声を正確に記せる表記方法はまだ普及していないため、眼で読むと非常に不自然な発音になってしまう。また聴くことをおろそかにすると、自然な発話の抑揚も掴めなくなってしまう。

以下に、筆者自身が以前、トルコ語話者に囲まれて3年間生活して気づき、2019年7月の沖縄島訪問以降、琉球諸語話者とのやり取りを通して再確認した「そのとき吸収すべき学習項目が耳につく」という現象の活用法を紹介する。

誰かが琉球諸語を話しているとき、漠然と長い発話全体を聞き取ろうとしたり、単語のみを取り出そうとしたりするのではなく、そのとき、よく耳につく句を取り出して、その意味を問うとよい。

例) 「まじゅん」ってなに？ (一緒に)
 「沖縄口 (うちなーぐち) さーに」ってなに？ (沖縄語で)

このように、意味にまとまりのある句ごとに語彙を覚えていくと、その語彙をそのまま使用することができる [Jolsvaiほか 2020]。日本語で話しているときに、琉球諸語の句で

表現できる箇所は、日本語の句と入れ替えて話すようにすると、徐々に琉球諸語で話せる割合が増していく。

ある程度、語彙力がついてくると、今度は、よく耳につくが語形変化を予測できない語彙が気になり始める。そこで初めて、文法知識を紐解くとよい。言語習得の進度に合わせて、耳につく文法項目が変わっていく。つまり、耳が自ずと学習項目の難易度順を示してくれる。したがって、興味があれば別だが、必要以上に難解な文法項目を読む必要はない。今必要な発達段階の文法項目が定着してからでないと、身につかない可能性があるからである [白井 2002]。

最後に、耳についた表現それぞれについて十分な用例を聞く必要があるため [Theakston & Lieven 2017]、身近な話者による琉球諸語使用を引き出せるよう、働きかけなければならない。また、新しい話者の側も、日々の生活に流されて、何日も琉球諸語に触れていないという状態に陥りがちであるため、ガーデニングやフィットネス、ジョギングなどを日課としている人たちのように、定期的に琉球諸語に触れたり、意識的に話者と過ごす時間を作り出して習慣化する必要がある。特に、新しい話者自身が会話のやりとりに参加すると、新しい話者自身にとって関連性の高い話題になりやすいため、有用な表現に出会える可能性が高くなる。ある南米出身の沖縄県系女性は、日本語、スペイン語、英語それぞれの高度な言語運用能力を維持するために、毎週、何曜日の何時から何時までは誰と何語で会話するという風に日課を決めていると話していた。

3-5 琉球諸語の多様性を可能な限り温存するには？

多様性を温存する方法について考察する前に、2つ振り返っておきたいことがある。

1つは、前述したように、日常生活における琉球諸語の使用を継続させるためには、次世代の新しい話者の存在が欠かせないことである。もう1つは、認知面と感情面のどちらに問題があっても、個人の言語習得に支障が出るということである [Swain 2013]。感情面に好影響を与える要素には様々なものがあるが、本稿では特に、動機を高める「自尊心」「好奇心」「主体性」「自己効力感」「自分自身のこととして大切に思えること」に焦点を当てたい [Dörnyei 1994]。

両者を併せて考えると、新しい話者自身が主体性を発揮して、琉球諸語の開花の推進役となることが望ましい。マン島でもLRの推進役を担っているのはマン島語の新しい話者自身からなるネットワークである。北西ウェールズではウェールズ語の世代間継承がまだ断絶していないため、子供に母語を継承できる親世代の母語話者が中心になり、草の根から政府の言語政策まで幅広く深く踏み込んだ言語維持活動を実践している⁸⁾。

琉球列島で彼らに準じる存在があるとすれば、沖縄ハンズオンNPOである。沖縄県からの助成金も有効に活用し、沖縄語だけでなく、広く社会問題や青少年の人材育成にも貢献している⁹⁾。直近で最も印象に残っているのは、沖縄国際大学うちなあ島んちゅ倶楽部と沖縄ハンズオンNPOの新しい話者が、2020年秋から定期的にオンライン配信した「しまくとぅば技伝講座2020」である。

主に沖縄語話者を招き、自生する菓草、伝統的な竹かご、指笛、わらべ歌など、世代間

の記憶をつなぐテーマでセッションを進めながら、進行役として話者と視聴者に積極的に沖縄語（と話者の地域の琉球語の挨拶）で語り掛けていた。私自身、毎回参加するうちに、沖縄語を話すことが当たり前に感じられるようになっていった。実際、2020年11月と2021年1月に同じ女性話者が計2回招かれたが、11月時点ではほとんど沖縄語を話さなかった彼女が、1月には積極的に沖縄語を話すようになっていた。自発的に話したくなるような雰囲気を感じたようである。このように、新しい話者は、他の潜在的な新しい話者の意識を高めるだけでなく、話者の心の重荷を解き、彼らが琉球諸語を再び話し始めるきっかけを提供することができる。

琉球諸語は奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の6言語に分類され、さらに複雑な下位区分が存在する [Karimata 2015]。前述した沖縄ハンズオンNPOは、沖縄島中南部の沖縄語地域に拠点を置いている。このような拠点が、各琉球語地域に少なくとも1つずつ生まれ、各地域内でリーダーシップを発揮できることを願っている。新型コロナウイルスの世界的大流行が発生する直前の沖縄島訪問時に、数か所の琉球語地域で孤軍奮闘する30代の新しい話者と個別に知り合う機会があった。彼らに潜在的に共通する方向性を感じられたため、2020年6月に予定していた次回訪問時に、互いの紹介を兼ねて親睦会を設ける予定であったが、未だ実現していない。こうした新しい話者のイニシアティブを話者と専門家が支えられる仕組みが構築される日が来ることを願ってやまない。

3-6 琉球の世界観に基づく思考の枠組み

琉球の思考の枠組みについて考える上で最も重要なことは、我々には諸集落（シマ）の基盤となるIndigenous land and sea（そこで代々暮らしてきた人々の土地と海）が存在するということである [Zlazli 2021b]。琉球の世界観を育んできた自然生態系の恩恵を最大限に享受するには「内政を独自に行使できる」自治権 [長谷川 2020: p.4] をできるだけ回復することが理想的である。また、その世界観を内包している琉球諸語も非常に重要である。琉球諸語を含む、琉球に関する研究の最先端拠点をなすだけ琉球域内に集約するのが望ましいと考える。

イングランドの大学に在籍して、現地の学生が他の文化圏や言語圏を迂回することなく、自分の文化と言語を最大限に発揮して学問の探究に没頭できるさまを見て、自分がまず日本の規範に適応して、さらにイングランドの規範に適応する努力をしなければならなかった迂回の連続を苦々しく思った（相対的な視点を広く持つことができたのは嬉しい）。そこに費やした時間を、琉球を起点として周囲に広がる諸国・諸領域との連携に注ぐことができれば、世界的な議論に、琉球独自の視点から直接参入することができ、世界的な地歩を固める自己ブランディングの一步を踏み出せるかもしれない [Harmsworth & Tahi 2008]。国際地政学的な動向を見据えて、現実的な戦略を練るとともに、多元性を内包している琉球列島全域および諸琉球ディアスポラ間で相互理解と対話を深め、Indigenous rights（そこで代々暮らしてきた人々の権利）の獲得努力 [Zlazli 2021b] とともに、創造的な琉球の思考の枠組みを発展させていかなければならない。

3-7 現行の日本国行政の問題点

日本政府は政策上、琉球諸語を日本語の方言として扱っているため、アイヌ語のように、日本語とは独立した言語として琉球諸語政策を実施することは考慮していない。文化庁[発行年不明]によると「方言は地域の言語生活を生き生きとさせる豊かな言葉ではあるが、全国的なコミュニケーションの基本は共通語」であるため、琉球諸語はあくまで日本語による言語生活にやや彩りを添える程度の位置づけにすぎない。また、政府がそうした見解を掲げる根拠として、アイヌ民族がアイヌ語を日本語とは異なる先住民族のことばとして認めるよう主張し続けてきたのに対し、琉球はアイデンティティの拠り所のひとつとして自身が日本人であると捉えている人々が少なくない事実を挙げ、琉球諸語が日本語と切り離されることに強い抵抗感を抱く人々が多い現状では、国がその気持ちを無視して言語として扱うことはできないと主張している。また、話者自身が琉球諸語を使わずに多数派の言語に切り替えると決めたのであれば、政府が無理やり琉球諸語を使わせるような政策というものはあり得ないとも主張している¹⁰⁾。

しかし、名嘉山秀信氏が「歴史に目を閉ざす者は現在にも盲目になる」とドイツの故ヴァイツェッカー元大統領の言葉を引用して警鐘を鳴らしたように [しまくとぅば連絡協議会 2020]、琉球の人々は19世紀後半の琉球処分後に、帝国主義下の日本による同化政策のもとで母語である琉球諸語の放棄を迫られ [Kondo 2014]、敗戦後の米軍統治下では、日本人に同化して祖国復帰を果たすことにより人権が保障されると信じて自らのアイデンティティを抑圧し、戦前にも増して自らに母語である琉球諸語の放棄を課し、日本語の使用を積極的に自己奨励するようになったのである [長谷川 2014] [Masiko 2014]。上記の政府の見解には、こうした歴史的経緯に対する責任意識が認められない [Zlazli 2021b]。

あらぐしく米子氏は、バルセロナにおける1996年の「言語の権利に関する世界宣言」 [UNESCO Executive Board 1996] に基づいて、個人は基本的人権の一部として、私のおよび公的に自身の言語を使用する権利と、自己の言語と文化を教わる権利があることを指摘し、琉球の人々は琉球処分から現在に至るまで、言語権不在の状態でも長期間放置されてきたと主張する [しまくとぅば連絡協議会 2020]。日本の言語（教育）政策は、言語権不在のまま展開されているのである [杉本 2019]。

新しい話者を支援するには、一貫した言語計画の方向性を掲げて、数世代を通して継続的に支援できる公的な枠組みがあることが理想的だが、上記の理由により、現行の行政下では不可能である。行政改革を求めて政治的な働きかけをしていく必要があることは言うまでもないが、現行の行政下でも可能な代替案を並行して進める必要がある。一案として、一貫した明確な言語計画の理念と専門知識を有する民間ネットワークを確立し、自律的に研究および実践を推進しつつ、委託を受ける形で公的助成金も活用する方法が挙げられる。実際に、北ウェールズには、一貫した理念と専門知識を活かして、横断的な産官学連携プロジェクトを積極的に実施している団体がある¹¹⁾。

4. 今後の実施計画と将来の展望

博士研究のデータ収集は2023年夏に終了する予定だが、本研究で立ち上げたMAI-

Ryukyusプロジェクトは、博士課程修了後も市民活動団体として活動を継続する予定である。一貫した明確な言語計画の構築と、専門知識の蓄積を可能にする民間ネットワークの構築に寄与したい。

また、本研究では、新しい話者の視座から見た琉球諸語の開花の取り組みについて考察を進めているが、他にも検討すべき様々な課題が存在する。例えば、表記法に関する議論も、琉球社会の（新しい）話者自身の声が届かないまま、専門家のみの意見によって意思決定が進められている印象が否めない [小川 2015] [しまくとぅば連絡協議会 2020]。社会的に発言力のある人物の見解だけでなく、多様な地域社会の幅広い社会層の人々に可能な限り耳を傾け、適切な合意点を探っていくことはできないだろうか。多様な利害が複雑に交差する当事者間で合意を形成し、将来の言語計画の方向性を構築していくために、予算があれば、デルファイ法、階層化意思決定法、KJ（川北次郎）法、Win Win法、ソフトシステムズ方法論などの合意形成アプローチ [大西, 妻木, 白銀 2009] を試してみる価値があるかもしれない。

おわりに

本稿では、まず筆者の博士研究の背景、問い、意義、パラダイム、現時点までの実施内容を紹介し、その中間所見に基づいて、琉球諸語話者が抱える心理的トラウマ、琉球諸語の言語運用能力を高め多様性を温存する方法、琉球の思考の枠組み、現行の日本国行政の問題点について考察した。将来の言語計画の方向性を構築していくために、琉球の多様な地域社会の幅広い社会層の人々に可能な限り耳を傾け、合意を形成する試みが求められる。

注

- 1) 戦前の日本による同化政策が内在化したため。
- 2) 沖縄島滞在中、数人ではあるが、家庭や地域の中で幼少期から話しことばとして琉球諸語に親しみ、琉球諸語を母語として話す20代の人々に出会った。Fishman [1991] も、家庭や地域の中で言語を育むことの大切さを述べている。また、幼少時代の母語の記憶を頼りに、こうした20代の人々と琉球諸語で言葉を交わす70代の人々にも出会った。高齢の彼らが20代の話者に、他界した自分の親や祖父母を重ね合わせ、懐かしんでいる様子が印象的であった。
- 3) 幼少期に家庭や地域で琉球諸語を話す機会が乏しかったため、琉球諸語の開花の取り組みを通して琉球諸語を学んでいる人々 [O'Rourkeほか 2015]。就学期の学校でのイマージョン教育の場合も当てはまるため、特に年齢層は問われないが、本研究では若い成人世代を対象としている。
- 4) マン島のCulture Vannin <<https://www.culturevannin.im/>>のAdrian Cane氏も、社会の各方面に働きかけながらマン島語の普及に努め、転換点の達成を目指している。社会の諸分野で活躍し、ゆるやかに相互連携している若い成人琉球人ネットワークの1人も、この転換点を意識していた。
- 5) International Symposium on Autoethnography and Narrative (ISAN) <<https://iaani.org/>>で実例が鑑賞可能である。筆者は2021年1月2日～3日の同シンポジウムに参加した。

- 6) MAIは、Master/Mentor-Apprentice Initiativeの頭文字である。
- 7) 本稿の議論には視覚言語を含めていない。しかし、沖縄島滞在中にろう者の叔母に何の研究をしているのかと問われたとき、琉球諸語話者より言語権侵害の度合いが高い叔母に筆者自身の言語権回復を主張することはできなかった。非常に恥ずかしい思いをした。博士研究の範囲を超えるため、未だ着手していないが、将来、言語権について論じる際は、琉球諸語話者のみならず視覚言語話者や継承語話者の声にも耳を傾けて議論したい。
- 8) 現地で活動されている新しい話者（マン島）と親世代の母語話者（北西ウェールズ）の方々から、それぞれ直接お話を伺った。
- 9) 沖縄ハンズオンNPOの新しい話者の方々から直接お話を伺い、幾つか活動にも参加させていただいた。
- 10) 2019年3月のEメールによる通信で、文化庁国語課から得た見解に基づく。その根拠として、文部科学省組織令第99条（平成30年改正）が挙げられていた。
- 11) 2019年秋に、横山晶子氏の北ウェールズ訪問に同伴し、ウェールズ言語計画センター <<https://www.iaith.cymru>>のKathryn Jones氏を訪ねた。同センターは、非公開保証有限責任会社である。

参考文献

- 大西 淳, 妻木俊彦, 白銀純子 (2009) 『要求工学概論：要求工学の基本概念から応用まで』近代科学社, 東京.
- 小川晋史編 (2015) 『琉球のことばの書き方—琉球諸語統一的表記法』くろしお出版, 東京.
- 沖縄県 (2020) 「しまくとぅば普及推進計画」及び「しまくとぅば普及推進行動計画」について <<https://www.pref.okinawa.jp/site/bunka-sports/bunka/shinko/simakutuba/keikaku.html>> (最終閲覧日2021年1月23日).
- 国際交流基金 (2018) 「みんなのCan-doサイト」 <<https://jfstandard.jp/cando/about/summary/ja/render.do>> (最終閲覧日2021年1月23日).
- 国立国語研究所 (発行年不明a) 「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 プロジェクトの詳細」 <<https://www.ninjal.ac.jp/research/project/a/04-1/04-1-detail/>> (最終閲覧日2021年1月22日).
- 国立国語研究所 (発行年不明b) 「コーパス」 <<https://www.ninjal.ac.jp/database/type/corpora/>> (最終閲覧日2021年1月22日).
- しまくとぅば連絡協議会 (2020) 「【動画配信】しまくとぅばの復権シンポジウム 令和2年9月18日開催」 <<https://fmnirai.ti-da.net/e11725573.html>> (最終閲覧日2021年1月21日).
- 白井恭弘 (2002) 「第二言語における文法習得研究とその教育的示唆」『言語文化と日本語教育』第2002巻, pp20-27.
- 杉本篤史 (2019) 「日本の国内法制と言語権—国際法上の言語権概念を国内法へ受容するための条件と課題—」『社会言語科学』第22巻第1号, pp.47-60.
- 武田 丈 (2015) 「人権研究のための研究方法論：トランスフォーマティブな研究パラダイムに基づくCBPR」『関西学院大学人権研究』第19巻, pp.1-18.

- 長谷川精一 (2014) 「戦後」沖縄における「標準語」指導」『相愛大学研究論集』第30巻, pp.21-29.
- 長谷川秀樹 (2020) 「ヨーロッパにおける「島嶼地域」の自治権・特別地位について」『島嶼地域科学』第1号, pp.1-19.
- 文化庁 (発行年不明) 「I 言葉遣いに関すること : 2言語環境の重要性 : (2)方言の尊重」
<https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/20/tosin03/04.html> (最終閲覧日2021年1月21日).
- 横山晶子 (2019) 「世代の記憶繋ぐ手法」『南海日日新聞』11月6日。
- 横山晶子, 籠宮隆之 (2019) 「言語実験に基づく言語衰退の実態の解明—琉球沖永良部島を事例に一」『方言の研究』第5巻, pp.353-375.
- Kocher, K. (大山泰宏, 大山万容訳) (2017) 「<特集>精神分析からみたトラウマの世代間伝達 (特集III : 講演会抄録)」『京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要』第20号, pp.36-43.
- Adams, T., Jones, S. L. H. & Ellis, C. (2015) *Autoethnography: Understanding Qualitative Research*, Oxford University Press, 216p, New York, United States.
- Akamatsu, N. (1998) L1 and L2 Reading: The Orthographic Effects of Japanese on Reading in English, *Language, Culture and Curriculum*, 11(1), pp.9-27, London, England.
- Bishop, R. (1998) Freeing ourselves from neo-colonial domination in research: A Maori approach to creating knowledge, *International Journal of Qualitative Studies in Education*, 11(2), pp.119-219, London, England.
- Chang, H., Ngunjiri, F. & Hernandez, K. A. C. (2013) *Collaborative Autoethnography, 1st edn.*, Taylor & Francis Group, 200p, New York, United States.
- Degai, T. S. & Petrov, A. N. (2021) Rethinking Arctic sustainable development agenda through indigenizing UN sustainable development goals, *International Journal of Sustainable Development & World Ecology*, pp.1-6, London, England.
- Dörnyei, Z. (1994) Motivation and Motivating in the Foreign Language Classroom, *The Modern Language Journal*, 78(3), pp.273-284, New Jersey, United States.
- Fishman, J., A. (1991) *Reversing language shift: theoretical and empirical foundation of assistance to threatened languages*, Multilingual Matters, 448p, Clevedon, England.
- Gladwell, M. (2002) *The tipping point: how little things can make a big difference*, Back Bay Books, 301p, New York, United States.
- Guba, E. G., Lincoln, Y. S. & Lynham, S. A. (2017) Paradigmatic Controversies, Contradictions, and Emerging Confluences, Revisited, In Denzin, N. K. & Lincoln, Y. S. (eds.), *The SAGE Handbook of Qualitative Research, 5th edn.* (pp.108-150), SAGE Publications, Inc, London, England.
- Harmsworth, G. & Tahi, M. (2008) Indigenous branding: examples from Aotearoa-New Zealand, *2008 FIBWA - Fostering Indigenous Business & Entrepreneurship in the Americas Conference*, Manaus, Brazil.
- Hinton, L., Florey, M., Gessner, S., & Manatowa-Bailey, J. (2018) The Master-Apprentice Language

- Learning Program, In Hinton, L., Huss, L., & Roche, G. (eds.), *The Routledge Handbook of Language Revitalization* (pp.127-136), Routledge, New York, United States.
- Hinton, L., Huss, L. & Roche, G. (eds.). (2018) *The Routledge Handbook of Language Revitalization*, Routledge, 521p, New York, United States.
- Jolsvai, H., McCauley, S. M. & Christiansen, M. H. (2020) Meaningfulness Beats Frequency in Multiword Chunk Processing, *Cognitive Science*, 44(10), pp.1-17, New Jersey, United States.
- Karimata, S. (2015) Ryukyuan languages: A grammar overview, In Heinrich, P., Miyara, S., & Shimoji, M. (eds.), *Handbook of the Ryukyuan Languages: history, structure, and use* (pp.113-140), De Gruyter, Inc. Series: Handbooks of Japanese language and linguistics, Berlin, Germany.
- Kondo, K. (2014) Japanese language education in modern Okinawa until 1945, In Anderson, M. & Heinrich, P. (eds.), Ando, Y. (tran.), *Language Crisis in the Ryukyus* (pp.54-81), Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne, England.
- Masiko, H. (2014) The politics of the movement to enforce standard Japanese under the U.S. occupation, In Anderson, M. & Heinrich, P. (eds.), Heming, P. (tran.), *Language Crisis in the Ryukyus* (pp.82-102), Cambridge Scholars Publishing, Newcastle upon Tyne, England.
- O'Rourke, B., Pujolar, J. & Ramallo, F. (2015) New speakers of minority languages: the challenging opportunity – Foreword, *International Journal of the Sociology of Language*, pp.47-67, Berlin, Germany.
- Priyadarshini, P. & Abhilash, P. C. (2019) Promoting tribal communities and indigenous knowledge as potential solutions for the sustainable development of India, *Environmental Development*, 32(3), Amsterdam, Netherlands.
- Roche, G. (2020) Abandoning Endangered Languages: Ethical Loneliness, Language Oppression, and Social Justice, *American Anthropologist*, 122(1), pp.164-169, New Jersey, United States.
- Roche, G., Maruyama, H. & Viridi Kroik, Å. (eds.). (2018) *Indigenous Efflorescence: Beyond Revitalisation in Sapmi and Ainu Mosir, Monographs in Anthropology series*, Australian National University Press, 236p, Canberra, Australia.
- Romm, N. R. A. (2015) Reviewing the Transformative Paradigm: A Critical Systemic and Relational (Indigenous) Lens, *Systemic Practice and Action Research*, 28(5), pp.411-427, New York, United States.
- Siegel, D. J. (2018) *Aware: the science and practice of presence: the groundbreaking meditation practice*, TarcherPerigee, 304p, New York, United States.
- Soja, E. W. (1996) *Thirdspace: journeys to Los Angeles and other real-and-imagined places*, Blackwell, 346p, New Jersey, United States.
- Swain, M. (2013) The inseparability of cognition and emotion in second language learning, *Language Teaching*, 46(2), pp.195-207, Cambridge, England.
- Theakston, A. & Lieven, E. (2017) Multiunit Sequences in First Language Acquisition, *Topics in Cognitive Science*, 9(3), pp.588-603, New Jersey, United States.
- Tovar, J. G., Barletti, J. P. S., Larson, A. M., Barnes, G., & Tucker, C. M. (2021) Can

multistakeholder forums empower indigenous and local communities and promote forest conservation? A comparative analysis of territorial planning in two Brazilian states with contrasting contexts, *Conservation Science and Practice*, 3(1), pp.1-14, Washington, D.C., United States.

UNESCO Executive Board (1996) *World Conference on Linguistic Rights: Barcelona Declaration*, Paris. <<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000104267>> (最終閲覧日2021年1月21日)

Wahl, D. C. (2020) *Sustainability is not enough: we need regenerative cultures*, *Medium*, United States. <<https://designforsustainability.medium.com/sustainability-is-not-enough-we-need-regenerative-cultures-4abb3c78e68b>> (最終閲覧日2021年1月22日)

Widianingsih, I. & Mertens, D. M. (2019) Transformative research and the sustainable development goals: challenges and a vision from Bandung, West Java, *International Journal for Transformative Research*, 6(1), pp.27-35, Berlin, Germany.

Zlazli, M. (2021a) 「お父さんに聞いたらなんでも教えてくれる。」<<https://twitter.com/MihoZlazli/status/1352438301995765763>> (最終閲覧日2021年1月23日)

Zlazli, M. (2021b) While we are asleep: Current issues in language revitalisation of Ryukyuan languages, *SOAS Working Papers in Linguistics*, 20, London, England, Forthcoming.

(投稿 2021年 1月 24日)

(受理 2021年 4月 13日)

【Research Note】

Efflorescence of Ryukyuan Languages from Perspectives of New Speakers

ZLAZLI Miho

PhD Linguistics candidate at SOAS University of London, funded by CHASE AHRC DTP2
Studentship

(Received on 24 January, 2021; Accepted on 13 April, 2021)

I currently conduct a project called MAI-Ryukyus to support new speakers of Ryukyuan languages based on Hinton's Master/Mentor-Apprentice Language Learning Program as part of my PhD research. Research questions are what drive new speakers to speak Ryukyuan languages, how to acquire Ryukyuan languages without compromising their diversity, and what the Ryukyuan (research) paradigm will look like. Based on the interim findings, I discuss psychological traumas of Ryukyuan language speakers, how to develop language competence and maintain the diversity of Ryukyuan languages, and the impact of the current Japanese government's administration on the Ryukyuan (research) paradigm and Ryukyuan languages.

Keywords: endangered languages, language revitalization, new speakers, Ryukyuan languages